工業大学新聞
東京工業大学新聞部会新聞部■目黒区大岡山2－12－1■電話（726）1111・内線（2392）
1969
3月20日号
第674号
発行／毎月5日・20日　1部15円
〒共・年間150円振替東京76839

卒業生特集号

〈紙面案内〉
□一面
革推会団交粉砕さる
卒業生にむけて
入寮選考行わる
巨視微視
□二面
四年生有志ビラに反論する
文化部会
運動部会
社会部会
技術部会
専門委員会
東工大闘争勝利のために
□三面
卒業生名簿
□四面
全面広告
□五面
横国大闘争にふれて
「反」体制、あるいは反「体制」について――京大闘争
不当拘留開示裁判ルポ
□六面
私達の闘いは、私達にとって何か
文化運動・サークル活動とは真の大学建設を
――建築学科助手会
（編集部）

3.24団交砕粉
バリケード前に五百名が結集

革推会を大衆的に粉砕

革推会と当局の収拾団交が二〇日に予定されていたものが、十九、二〇日の公開討論会において革推会は二四日に団交要求を行った。

二四日バリケード前に革推会数十名が姿を現わした。すでに教授会は公開予備折衝を行う名目で学校に大挙しておしかけることを決定していた。午前十一時頃、慶伊、永井、馬場 各教官を先 頭として、約二百名の教官が正門前に姿を現わした。先ず学長名で公開質問状を執行委員会、五寮委員会、革推会の三者に、団交の条件、全斗委の構成等々に対する見解を問う目的として送ってきた。これに関しては全く回答することもないので、斯波学長の弾劾によってそれに答えた。その後「声明」という文書ではっきりと革推会との団交に応じる旨を伝えてきた。この「声明」の意図に基いて、革推会のボス要求に従って大学当局はこの日姿を見せたのである。

全斗争は、この革推会と当局のデッチ上げ、分裂、ボス、収拾、インチキ団交粉砕のため、全員ヘルメットをかぶりバリケードを守り、正門前にいる当局と革推会に向けて激しいアジテーションを行ない、又はデモンストレーションを行って革推会の組織的破産をはっきりとあばき出した。革推会は十九・二〇日の公開討論会のあともなおかつ政治的に動く功妙さを身につけ自己の破産をぬり隠し、こうかつに動き回り、調停者たらんと努めたにもかかわらず、全斗委の思想的にも政治的にも上回る力量の前に何らなすすべもなく、ただ仕方なく集会を続けるにすぎなくなった。

午後四時過ぎ、団交粉砕の追いうちをかけるため全員バリケードの外へ出て、弾劾集会を開き、すべての大衆の前に公然と五項目要求貫徹の集会を勝ちとった。その後革推会の集会を実力でもって粉砕し、教授会メンバーをすべて退去させた。自己批判して頭をまるめることも知らない教授とすぐに団交を開くわけにはいかないのである。大学院闘争委員会と連帯した大岡山駅前デモを百五十名規模で打ち抜き更に学内に戻り総括集会を開き解散した。

機動隊導入の恫喝行使

翌二五日、朝から教授会を開き二日続けて大学に来ることを決めた当局はこの日も午後になって姿を見せた。この日は全員いっしょに来て団交をやる目的ではなく一般的なお話し合いに来たのであって、その実は「こんなに私達は問題の解決に努力しているのだ」という姿勢を示すことにあり、その見えすいたポーズはついに教授会内分裂を生み出してしまった。つまり先に来て学生と話しをするグループの教授達は、目黒駅等で待っている教授達に先に帰られてしまったのである。この日も革推会は教授会よりも早く来てたむろしていたが特別に集会を開くでもなく、教授会が来たとき、すわり込んで集会をやっと始めたが、もはや彼らの力ではどうにもならないことが明瞭になった。

さてこの二日間にわたって大岡山周辺に一小隊約三十人の警官隊が待期し、ことあらば学内導入の期をうかがい、また街頭デモの指揮者を逮捕することをねらった。都内唯一のバリケードに対する鋭敏な反応はすぐれて国家権力の方に現われているのだ。しかしこうした事実は未だ端緒的な表われであって、次々にくり出されてくる弾圧策謀を今から心がけながら闘争をしていかなければならないだろう。さらにこの日、道家助教授がハンドマイクで「機動隊二百名余がきていて今全闘委の行っているデモが無届けデモであるから回りにいる人は早く帰って下さい」という悪らつな宣伝を行った。私達は満心の怒りをこめてこの権力の手先となり下がった者を徹底して東工大から放逐するだろう。

二日間にわたって団交は粉砕され、いまや全闘委を出し抜いて何か陰謀を行うことは不可能となった。

今後四月二〇日をメドにして学内の〝正常化〟を計ろうとしている当局の収拾策動を粉砕していくことを追究しながら、この団交が粉砕された後より一層露骨に収拾に乗り出すであろう当局の動きを注意しておくことが必要である。

所感

卒業生にむけて
科学技術者としての自己を切開せよ

卒業生諸氏！

諸氏にとって〈卒業〉を最も〈有意義〉なものとしうるのは、ストライキの中で、日常的な〈卒業〉の不可能性（まさにストライキの〈成果〉だ）の意味を自己の内部につきつめることだ。君らの〈卒業〉は〈卒業証書〉という紙片れ一枚によって支えられ、保証されているにすぎない、という事実を直視せよ。大学における様々なセレモニーの幻想性、つまり、あってもなくてもいいものとしてあるシャンシャン〈卒業式〉の意味を問い詰めよ。

東工大における、二ケ月に及ぶストライキ闘争が显示したものは、共同利害にまつわりつく、様々な幻想性を、一個一個その根を明らかにしていくことによって個別的な自己の姿を、白日のもとにさらけ出した、ということであった。

大学とは、自己の研究を国家に売り渡すことによってしか存在しえない商品にすぎなかった。国家予算によって買いとられ、又、それによってしか存続しえない、全く、資本の運動に包摂された存在でしかなかった。

大学とは、単に、技術労働者＝労働力商品をつくり出す場であるだけでなく、大学それ自身が、商品として科学技術の研究成果を切り売りすることによってのみ、存在しえたという冷厳な事実。

そして、物的関係における、完全な従属性の裏返しとして、幻想の絶対化が生みだされるのだ。〈科学技術〉至上主義、学問、研究の絶対化、ETC。まさに、幻想による物理的関係の支配の構造が明らかにされたのだ。

大学が、自己の、特殊な利害を追求すればする程、共同的な利害に包摂されざるをえない。科学技術の〈成果〉を上げれば上げる程、大学を越えた社会の次元においては対立物を生みだすという構造の裏返しが、二・一バンフに表象された大学の幻想であったのだ。利害関係以外のところでは、何でも受け入れ自己の主張は、幻想性として疎外される。或いは、対立関係の合理化として表象されるということを示した。

卒業生諸氏！

大学が、諸氏らを〈卒業〉式を経ずに、卒研も中途半端なまま、企業に送り出すのは、何も、卒業生諸氏に対する〈お慈悲〉からなどでは決してない。大学が置かれた位置の故である大学が、社会との間に結んだ〈契約〉の破棄を恐れるがゆえだ。

まさに、大学が、この間の闘争において、国家との〈契約〉の破棄を恐れて、二・一バンフ的な対応しかなしえないと同じ関係が貫ぬかれているのだ。〈卒業〉とは、大学との関係で考える時、〈する〉のでは決してなく、〈させられる〉のだということだ。そして、実は、もっと、重要なことは、〈させられる〉ということが〈する〉ことと幻想化されていることである。大学にとっては、〈卒業〉式など必要なく、〈必要〉に応じて、卒業証書を与えさえすればいいのだ。逆に〈卒業〉証書とは、大学が社会内におかれている最初の従属関係の集約としてあるのだ。

さて、諸氏が、技術労働者、及び科学技術者として、社会に出るということは、この間の闘争で若干なりとも明らかになったこの様な対立関係の、細分化個別化としてあるということである。

現体制において、個別性あるいは特殊性は、そのまま現れることはなく、かならず共同的なあるいは社会的な位相を伴って現れる。〈科学技術〉の研究、〈社会の発展の為〉にやろうと〈それを使うものがわるい〉といいながら科学技術を研究しようと、それは、幻想性としてしかあらわれず、共同的には全く逆転した位相が显示されるだけだ。つまり、個別性においては幻想性が自己の特殊利害を支配するが、共同的な場においては現実的利害が、幻想を支配するという構造があるだけだ。

技術労働者の特殊性。それは自己の頭脳を切り売りすることによってしか、つまり、観念を物化させることによってしか、〈生活〉しえないところにある。観念を物化させることなくして、生活しえず、生活しようとすれば、頭脳を商品として切り売りせざるをえない呪われた存在。恣意性＝日常性を、共同性（社会性）の中でしか実現しえない自己の存在が問われねばならぬ。

卒業生諸氏は、否応なく、この対立関係の真只中にたたき込まれるのである。そして工大最後の三ケ月において、早くも姿をみせた、その対立関係をどう把握するか、が決定的に問われている。そのことによってのみ〈卒業〉は諸氏にとって〈意義〉を持ち得、〈出される〉のではなく、〈出る〉という主体的な契機となしうると考える。

革推会解体宣告さる

＜写真説明＞上、右共に3.24団交粉砕集会

三月十九日、二〇日教授会－革推会団交を前に、全闘委主催による革推会との公開討論会が行なわれた。一時よりこの討論集会に約五百名の学友が結集した。

討論は、主要にスト権、団交権の問題に、集約されつつ展開された。中で、革推会は、「スト権は以前からあった」として、ストそのものが、大学当局に対する徹底した抗議行動である事を見落していた。

「学生参加」によって「学生の意志の反映」を設定することによってのみ、闘争の展望を語り得たのである。この方向性は、幾度も繰り返されてきたように、ストの現実的な行動である事を見落す事によって陥る闘争圧殺へと向かわざるを得ないのである事が暴露されたのである。

二〇日、前日の討論から、明らかにされた、五項目要求を掲げ得ない革推会を糾弾した。この日の討論によって五項目要求を掲げて闘かわれている無期限ストライキの中で革推会の解体宣告が下されたのであった。

入寮選考行なわる

五寮委員会

入寮選考は、三月二十四日行なわれた。この次、四月中旬にもう一度選考が予定されている。しかし、例年の如くに行なわれたわけでは決してなかった。ここに、入寮選考を、学生の手によって行なわれた経過を報告してもらった（編集部）

入試業務も完了し、新入生を迎えいれる四月を目前にひかえた現在東工大闘争は新たな局面に突入しようとしており、この基幹をなしている寮問題に関してみると、〇管規の重要な一環を占めている入寮選考の問題が、にわかにクローズ・アップされてきた。

我々が〇管規白紙撤回を追求する時、当局に対し、声明を要求していくのは当然ながら実質的にもそういった攻勢を切り崩していくという方向性をもった闘いとして展開しなければならない。その様な意味で今回の入寮選考は、東工大闘争にとって非常に大きな意味を持っている事を、まずもって確認しなければならない。しかし、それだけには止まらず今後遅かれ早かれ、国立二期校である東外大電通大等においても同じ問題がひかえている事を考えるならば、今回の東工大における入寮選考の結果が全国寮闘争に与える影響は非常に大きなものであるという事は否定できない。また、その中において、今後のわれわれの闘争の方向性も自ずから明らかになるであろう。

以上のような観点から、われわれは当局からの如何なる妨害があろうとも、入寮選考を完全に寮生独自の手で貫徹しなければならない。しかしながら、大学当局は、そのようなわれわれの闘争方針を一早く察知してか、またもや悪辣な策動をめぐらし始めている。これを以下事実経過を踏まえながら簡単にのべてみよう。従来、工大における入寮選考は、全寮の正副委員長からなる組織である五寮協議会に厚生課長が加わって選考に当たり、課長は採点に加わらないものとしてあった。しかし、これは権力の常識手段である「なし崩し的」な攻撃に他ならず、まず選考に参加し、時期をみて採点に加わり終には入寮権を全面的に大学当局の手中におさめようとしているものであることを明確に見抜かなければならない。これは、われわれが常に見抜いてきたことであり、現在に至ってもそれは何ら変わる事はないし、また、これが全く正しい把握であることが以下の事実からも容易に確認する事ができよう。

三月十五日夜、一寮生が厚生課長に、「入寮選考に関して、書類が必要なので今日中にぜひ見せてほしい」と電話したところ、「厚生課長と教務次長の立ち合いを認めるなら」といってきた。しかしながら、寮の管理運営権、その一環としての入寮権は明らかに寮生の手にあり、大学当局もまがりなりにも、管規白紙撤回を声明している以上、彼らが入寮権に関して、とやかく口をはさむ根拠は全くないはずであり官僚の立ち合いを認めるかどうかは、全くわれわれに立合いを条件として書類を見せないなどというのは正に官僚の横暴以外の何ものでもない。しかし実際には問題はそれ程簡単なものではなく、この裏には一部ボス教授連で代表される大学当局の重大な意図が隠されているのである。

その大学当局の意図は、次の事実に最も如実に現われている。彼らは、われわれが十五日夜厚生課より入寮選考書類を実力で持っていったのに対し、翌十六日には厚生課長より、遅れて到着した書類を取りにくるように、との電話をしてきたことにより、暗黙のうちにわれわれの入寮権を認めてしまった。しかし、もともと彼らにとってそれが認められないものとしてある以上、当局は過去の事を一切抹殺するため、二十一日になってそれらの書類を一方的に無効と決定し更には教務部長署名入りの新たな書類を各入寮志願者に再送付し、しかもその提出先を目黒局止めとしているのである。この事は一体何を意味しているのか？それは正に、国大協自主規制路線における大学当局自らの手による寮自治の弾圧でしかない。

即ち、文部省の直接の寮自治の弾圧である〇管規に対しては反対し、白紙撤回すると放言して、あたかも大学の自治を守ろうとしているかのようなポーズを見せながらも現実には、彼ら自身が〇管規の内容そのままを、あるいはそれ以上の事を何のためらいもなく履行しようとしているのである。ここにこそ、〇管規白紙撤回の白紙撤回たるゆえんがあるのであり、革推会のように当局の策謀にふり回され、理由がついていれば白紙撤回で良い等とうそぶいているが白紙撤回の理由としては「本学としては容認できない」だけで最早充分であるのだという事を理解できない連中には、この闘争をになっていく資格は、全くないのである。

以上の様に、この間一貫して欺瞞的な対応に終始してきた大学当局は、ここに至ってはからずも彼らの本性を余りにはっきりと、自己暴露してしまった。即ち、彼らにとって寮自治などというものは毛頭認めることができないものなのであり、如何に破廉恥であろうとも、あらゆる手段を用いて寮生独自の手による入寮選考を阻み、当局の手による選考を強行し、この際一気に当局の手に入寮権を掌握してしまおうと企んでいるのである。

である以上、そのような攻撃に対する我々の答は、あらゆる妨害をはねのけて、二十四日の入寮選考を断乎として貫徹することであった。そのために我々は全力をもって闘い抜きこの東工大闘争の更なる発展への突破口を今切り開いたのでありすでに三十名の学友が闘いの戦列に加わりつつある。

巨視微視

蓮根の穴はいくつあるか。穴がいくつあるかが問題なのではない。問題は、穴が大きいのか、小さいのか、なのです。蓮根の穴を無限に拡げていったらどうなるか、それは穴ではなくなるのです。正に弁証法です。実体としての蓮根の否定としての穴の無限の自己主張が極限において否定される否定の否定です▼バリケエドのことを語っているのです。バリケエドの中に造り出される世界とは何か？ バリケエドを極度に抽象化しある空間を区切る線分としたとき、それは最も想像力に富んだオブジェなのです。バリケエドが区切った空間は想像力によって果しなく拡大し、千変万化します。いかに多くの「記者」が中を空想し又たずね入ってその神秘な世界を報告したことでしょう。そして多くの人々が「バリケエドの内なる思想」や「内なるバリケエドの思想」を語り、そこに自らの想像力を開花させたのでした▼バリケエドが線あるいは面であるならば、当然それは外と内との圧力の均衡の上になければならないのです。外からの圧力が権力であるとするなら、内からの圧力とは何でしょうか。誰でもあの国家権力に対抗し得る強固な「自己権力」や「革命権力」を想像することが出来ます。だが私達の目の前にある物質としてのバリケエドは永遠ではなく、あたかも特殊な実験条件でのみ瞬間的に確認し得るあの素粒子の一つのように私達の前にあり、私達に何ごとかをわからせてくれます▼今私達は「大学」という幻想共同体の渕にバリケエドという線を引いたのですが、その途端にゴムボールを裏返しにしたように旧来の「大学」はバリケエドの外にあり、私達はバリケエドの内という「大学の外」にいることになるのです。この奇妙な裏返しは「大学」が正に権力の機構の一部として存在していたことが明らかになると同時に、私達のバリケエドが「大学」を通してのみ存在し得ることも明らかです。したがって私達も又権力のエーテルにどっぷりとひたっているわけです。凡そ権力のエーテルにひたされていないものなどこの世にありません。たとえ「反体制」や「反権力」の旗を高くかかげて、雄々しく闘っていようともそれが存在しているかぎり権力のエーテルの中でのみその存在が証明されるのです。したがって今私達が闘っている闘いも又終始こうした自己矛盾を運命づけられています。▼権力と我々の闘いとの関係を私達の闘いを最大限の評価を下した所である平面で切断してみればそれは蓮根の穴のようなものです。だからこそ権力は強固であり私達の闘いとはもしかしたらほんとうに「反動の手先」なのかも知れない（それを最後的に肯定するものも否定するのも歴史のみである）という不安の中の永遠のねじり合いなのです▼あの強固な日大のバリケエドが消失した後、私達のバリケエドが作られたのです。そこでは当然「バリケエドの思想」が語られねばならないのです。あの日大のバリケエドに比べればあまりにも美しい幾何模様を描く正門のバリケエドがさしあたって私達の闘いの根拠地なのですから。（P）

自然　4月特大号　200円
☆特集・激動のなかの工学部☆
工学部白書
学生急増の背景とその実態を探る・道家達将
〈座談会〉変貌する現代の工学……石谷清幹ほか
自立的研究者をめざす闘い……東大都市工学大学院自治会（準）
現場からみた工学教育……中岡哲郎
化学工学の里程標（1）
昭和初期の東大造兵と理化学研・大山義年
□フラ・ボールの不思議……ロゲルギスト
□医局制度の解体始末記……水野祥太郎
□実地臨床医学教育の起源……阿知波五郎
□虫はいかにして糸をつくるか……飯塚英策
〈好評連載〉巨大機械
動き始めた大加速器の第一の成果・ユンク
東京・京橋　中央公論社

今年最大の日本人への贈物！
羽仁五郎
都市の論理

もし美濃部都知事がぼくに彼の「都民の都政」のイメージ・アップを頼んでくるとしたら、ぼくは、旧友羽仁五郎君の本書を推せんしようと思う。都市は論理をもち論理は筋をもち筋は光を都民に与える。そしてその光が集ってハイライトになったとき、これは、かのスモッグその他いっさいの黒いかげの正体を暴露する。羽仁君の本はそういう力をもっている。大内兵衛
◇強い実践の要求の下に生れ、しかも理論の根本から解明され、今日のあらゆる問題に光を投げ、将来の社会をきずくための手がかりを与える、あらゆる意味で新しい画期的な書！　慶大助教授 内山秀夫氏　武谷三男
◇これは読者の頭の中にしまいこむような古い学問ではなく、そこから行動が生まれてくるような新しい学問である。この本は民主政権えの解放の道を示している。　衆議院議員 井上泉
◇ほんとうの意味のベストセラーとなり品薄で読者に御迷惑をかけておりますが、増刷につぐ増刷で逐次配本いたします。
◇市民の・学生の・労働者の・女性のための都市学、はじめて確立！
◇自治体を無力にしているものはだれか？　独占資本の永久政権がいかに都市を破壊しているか！
◇警察機動隊が学生を襲う。独占価格の物価値上げが女性を襲う。公害が老人を襲う。暴走トラックが子どもたちを襲う。ジェット燃料タンク車が繁華街駅周辺をおびやかす。軍事条約体制が都市を包囲する。
◇われらはなにをなすべきか！
保守永久政権の腐敗の進行を阻止する唯一の方法は野党第一党への投票集中による政権交代。
都市は連合せよ。
独占の国家は死滅する。
◇ここに都市の論理がある。独占の論理に対する都市の論理を諸君の手に！
◆読者のこえより
◇新聞での大宣伝にうそはなかった。（宝塚市 D氏 27才 新聞記者）
◇すいこまれるように、読ませられる。（岩手県 K氏 32才 高校教員）
◇自治体はいかにあるべきか、われわれ新聞記者の目にとって大いに参考になる。（富山県 H氏 27才 新聞記者）
◇業務で毎週上京、電車の中で読書するが、これという書物になかなかぶつからない。「都市の論理」は最近にない名著で、地方に住むとよくわかる。（伊勢崎市 M氏 50才 自営）
◇部分的やバラバラにはいろいろな矛盾を感じていたが、本書によって問題点をはっきり体系的に知ることができた。周囲の人たちにもさかんにすすめている。（群馬県 G氏 53才 少年院）
◇大変な本で驚嘆している。（三鷹市 K氏 25才）
◇最近叫ばれている市民不在の政治、独占資本の拠点に滅び行く都市の前途。初めて知る都市の知見。（東京都 O氏 68才 自治体公務員）
◇著者の明晳なる理論の展開と、人民主権への心あたたまる良心にふれて、嬉しくなった。と同時に自分自身の責任をかみしめた。（東京都 T氏 25才 都立大学）
◇われわれは都市自治体についてあまりにも何も知らなかったことがわかる。たいへんな本だ。みんなぜひ読まなきゃならない。（東京都 T氏 43才 共産党員）
◇革新の主体的行動原理を明確にさし示す。（東京都 O氏 労働組合員）
◇土木建築技術者の都市計画技術の基礎になる思想書として好適である。（東京都 K氏 44才 東京工大卒 建築事務所）
◇すばらしい本である。イメージでなく、論理を掘り下げて論じている。市民の正当な反抗権を根拠づけている。（東京都 M氏 23才 東大大学院）
◇四年間の大学在学中にやったことの意味を疑わせるくらい問題が多く、理論武装というものも可能に思えるほどである。（鎌倉市 Y氏 24才 神戸大学卒 不動産会社）
◇万引でもしようかと思っていたらPb版が出た。ありがとう。！（藤沢市 N氏 23才 教員）
◇自治体公務員のバイブル。（名古屋市 61才 愛知県職員組合員）
◇まず何よりもおもしろい。羽仁氏独得の大ボラのスケールもあきれるばかりだ。その中にある現状把握が適確で、その批判力も素晴らしい。まれに見る強い説得力のある本だ。（大阪市 S氏 19才 府立住吉高校卒）
◇羽仁さん生きてたの？都市の論理は近年のヒットだよ！（愛媛県 H氏 36才 早大法卒 美登利寿司）
◇実際に読み進んでいくうちに大変な本だとわかった。綿密で重厚な論理は、胸のすくような思いです。日本では論理的ということをきらうひとが多いが、論理的であることがいかに生活と密着していることか感心している。（直方市 O氏 18才 高校生）
◇労働組合運動をする者として、本書の公刊に感謝する。（福岡市 H氏 27才 自治体公務員）
◇現実の壁に絶望しているものにとって、青空を仰ぐような気がする。（熊本県 T氏 54才 病院組合）
勁草書房　東京神田駿河台2　B6判 627頁　ペーパーバック版 480円　上製本 950円

武谷三男著作集
全6巻　装幀 峰孝　内容見本呈

現実のわからないことを究め、間違ったことは一刻も速く改革するために！　人類愛の情熱と理性が迸り出る物理学者の発言！
1　弁証法の諸問題　￥850
2　原子力と科学者　￥950
3　戦争と科学　￥950
科学なき竹槍日本軍はついに3月10日の大空襲や原爆の犠牲に国民を供し国を亡ぼした。旧軍人や官僚が現代戦を語るのはナンセンス以外の何ものでもない。原水爆・ナパーム・細菌・情報とみなごろし戦争としての現代戦の実態を明確にし、〝安保〟という虚構を再認識すべく科学者は叫びつづけずにはおられない！
◇以下4『科学と技術』5『自然科学と社会科学』6『文化論』続刊！
沼田稲次郎　労働基本権論　戦後労働法史のイデオロギー的側面　￥1200
谷川栄彦著　東南アジア民族解放運動史　￥1300
岡倉古志郎・国際政治論集3　植民地主義と民族解放運動史　￥850
旗田巍　シンポジウム日本と朝鮮　￥700
勁草書房

吉本隆明全著作集
全15巻　カタログ呈

あらゆる擬制からの解放をめざす文学と思想の前人未踏の体系！
第1巻 定本詩集〈第3回配本〉既発表の全詩集 ￥600
第2巻 初期詩篇Ⅰ〈第1回配本〉習作時代からの詩稿 ￥750
第7巻 作家論Ⅰ〈第2回配本〉アラゴンへの一視点ほか ￥750
新しいソビエトの文学
プイコフ、アクショーノフ、ソルジェニツインら現代ソビエト文学を代表する60年代の重要作品を集成　全6巻完結！　各￥580　セット販売中！　目録呈
江藤淳　夏目漱石　全論考を集成　再増補決定本 ￥800
兵藤正之助　正宗白鳥論 ￥950
磯田光一　比較転向論序説 ￥700
駒田信二　中国文学と日本文学　対いの思想 ￥900
人間が社会に存在しているかぎり普遍的な軌跡を確定した
疾風にもめげず逞しく　岩の上にも生命を根ざす
勁草書房

四年有志による
学友会破壊策謀を弾劾する

新入生に向けて、大学当局ならびに、4年生有志から個々人にビラが配布されている。この中での4年生有志のビラは、「部活動の停止状態」等意味の誤解なデマを流す事によって学友会費の納入を停止させようとするものがあった。このビラは、部活動、学友会活動に対して敵対的な意図による敵対を生み出そうとするものである。

新聞会は、新入生諸君に対し、サークルへの積極的な参加を訴えると伴に、学友会費の納入を通じて今後の学生生活の 活躍をも訴えるものである。ここに東工大各部会よりの4年生有志のビラに対する反対声明を掲載し、現在の部活動もなお行なわれている事を明らかにすると同時に、今後の活躍をも期したい。

(編集部)

文化部会

本学生活史の中に占められる。

(編集部 中村 浩)

大学政策の破綻と斗争の爆発

日本帝国主義外交の破綻を象徴するかの如く、日本の大学政策もまた破綻しつつある。それは文部省の"学園正常化"路線の破綻であり、特に国鉄、大学当局(経営者)の"法秩序"攻撃の破綻である。現在の学園紛争は、大学当局の"法秩序"攻撃に対する学生の反撃であり、それは、大学当局の"法秩序"攻撃の破綻を意味する。

日本帝国主義外交の破綻を象徴するかの如く、日本の大学政策もまた破綻しつつある。それは文部省の"学園正常化"路線の破綻であり、特に国鉄、大学当局(経営者)の"法秩序"攻撃の破綻である。現在の学園紛争は、大学当局の"法秩序"攻撃に対する学生の反撃であり、それは、大学当局の"法秩序"攻撃の破綻を意味する。

東工大斗争勝利のために
東工大斗争から沖縄斗争へ向うもの
斗争主体の共同性を対象化せよ

四年生への送辞

ブルジョア的価値観を拒否せよ

思想の肉体化を通して斗争の展望を

記憶の彼方にある日常性の領域を検証せよ

社会部会

運動部会

技術部会

専門委員会

全学ハリード封鎖

その技術の優秀さを世界に立証しました

無限の可能性を秘める磁気記録の分野に挑戦して15年。

オーディオ用のステレオテープレコーダーは今では世界最高級のおりがみがつきアメリカを始め世界各国にティアックの技術の優秀さを買われています。

そしてデータレコーダーをはじめ電子計算機記憶装置、データ処理装置、情報検索装置…などの電子計測製品でも、そのおうせいな開発力を立証ずみ。ティアックは情報産業の分野においても限りない前進が約束されております。

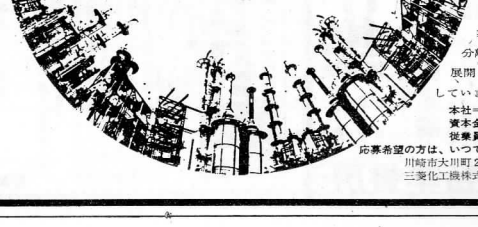
●ご応募の方はいつでも下記にご連絡又はご来社下さい。

テープレコーダー・データレコーダーの——

TEAC®

ティアック株式会社

本社人事課/東京都武蔵野市中町3-7-3 電話(0422)51-8181



"化学工場を造る"
——これが
私たちの仕事です

三菱化工機は あらゆる化学工業プラントの総合メーカーです。

三菱化工機は 現代科学の華 化学工業界と一体となって 化学プラントのエンジニアリングと化学機器製作にたずさわるフレッシュな企業です。

工場建設の助言 技術情報の提供 装置の建設等総合エンジニアリング会社への力強い歩みを続けています。石油化学工業の厖大な設備需要 伝統の固液分離技術を背景に独自の技術開発を展開しつつ 明日の企業の発展をめざしています。

本社=東京都千代田区丸の内2-6
資本金/12億円 売上高/年間200億円
従業員/約1,450名

応募希望の方は、いつでも下記にご連絡またはご来社下さい。
川崎市大川町2-1 〒210 電話(044)33-5361
三菱化工機株式会社川崎製作所 勤労課

「反」体制あるいは反「体制」について

―京大斗争からの凝問―

京都における爆発、六千名の自主防衛部隊を生み、その中から八百名の全共斗ゲバルト部隊を生み出した爆発の後で、行なわれた入試実力阻止斗争は、あまりにも想像力豊かであった。入試の当日デモ隊は二百名。京都に動員された機動隊は実に三千五百。その戒厳下の東大路をただ機動隊の攻撃を待ち受けるためだけのような数百メートルの行進、この間民青は北部に引きこもり一切姿を見せず、ただ「トロッキスト=自民党の手先」といった類のハリ紙だけが本部構内に充満しているだけの中で京大全共斗を中心とする斗いは些少にさえ見えた。だがそれは紛れもなく、全国的注視の中で行なわれたのであり、実にその時の情況の濃縮した空間としてあったのである。入試阻止が、いったい「入試強行阻止」なのか、入試制度そのものへむけられたのか、はっきり位置づけられないまま行なわれてしまった。にもかかわらずそれは、一つの事実として何等かの意味をもってしまった。おそらく高校における卒業式斗争との関連も語られるべきである。この斗争が茶番でないと言い得るのは京大全共斗のみであろう。なぜなら京大全共斗こそがもっとも重いものとしてこの入試阻止斗争を受けつがなければならないのだから。

「あらゆる見通しの素描は、たとえそれが多数の事実によって正当づけられていても、一つの選択であり、ある種の客観的可能性と同時に、各人の持っている革命的意識の強さと正しさを表現しているのだ。攻勢の見通しを描く者は常に挑発者扱いされるおそれがあり、後退の見通しを描く者は常に反革命家扱いされるおそれがある。」

日本共産党のナンセンスさはわかっている。それを数え上げればきりがない。ある時には、「東工大？ 民主化されてないな！」という言葉を聞いて笑い飛ばすようなものもあれば、裏切り!!六〇年安保における、六全協におけるあの裏切りに、憤怒することもある。

にもかかわらず、我々、六〇年代後半の「前衛党の神話」からの全き自由の中を歩んだわれわれは「日共=民青スターリニスト」のあやまりをあまりにも素直に理解しているのである。最近の我々のスローガン的到達点、特に東大闘争における「日共=民青」の「反革命」を経験して以来の我々の共通のスローガンは「民青殺せ!!」なのである。だが青山学院での一つの逸話、大学側があまりにも簡単に要求をのみすぎたとして斗争をエスカレートしたという逸話を対照させるならば、我々はあまりにたやすく「反日共」となってしまったのではないだろうか。何ももう一度日共の中から何かをくみとれとか、再評価せよといっているのではない。ただある週刊誌の調査をして民青の嫌いな理由の第一として「民青でない」ことを上げられてもなお（調査がインチキでないとして彼等にとってかくも致命的な結果だけに）こう然と存在している彼らの奥じんさ、我々の先輩たちが、それとのねじりあいの中から生み出してきたものとの極限的対立の中に、今もなお「革命」と「反革命」「体制」と「反体制」といった相通ずるあるいは相反するコトバの問題が含まれている。

反体制は体制か

たとえば「体制」という言葉はいったい何を意味しているのだろうか。「古田体制」「斯波体制」「資本主義体制」といわれるものは、いったい何を指しているのか。

「『体制』とは、ひとつの外被、人間疎外の装置であり、まず、本源的蓄積の段階で既成国家権力の「利用」という形をとる。資本主義は自己のもっとも熟した体制として一社会とくに一国家の政治的法治国、制度的（またイデオロギー的）暴力を内容とする継続的状態を生む……それは国家の暴力を「秩序」化する。全社会生活がその秩序=価値観の網の目につつまれる」これだけでは明確ではないし、大小含めた要するに一般的な形での「体制」とは、支配の体系、[illegible]とでもいっておいてよいであろう。問題は「反体制」である「反体制」の内容は別としても、「体制」は「反体制」なしにあり得ないし、また「反体制」は「体制」なしにあり得ない。「反体制」という「体制」等というまでもなく「反体制」が「反体制」のままで「体制」の一部を構成しているのである。したがっていわゆる「反体制運動」「反体制的立場」とは何なのか、それはとりもなおさず「体制」を打倒するということはどういうことなのかという問題として提出されるのである。

既成左翼の運動を戦後革命の敗北の中から、いわゆる「体制内反体制」として批判し、正に「体制内」的でない「反体制」として自らの運動を形づくって行こうとするとき、一つのジレンマ、集団は体制としてしか力をもち得ないという認識が、組織論やあるいはアナアキイな運動や、前衛党批判という形をとって表われてきた。問題は次のように深化され得る。つまり「《反》体制」なのか「反《体制》」なのか。つまり「体制」一般に対する否定なのか、現実の体制に対するアンチとしての「体制」なのか。「反体制」の中に含まれるこの二つの要素をいかに統一的に現実の運動に組みこんでいくかが一つの回答となるであろう。

六〇年安保の敗北の中から、斗わざる前衛党を打倒！、斗う前衛党の建設という方向が一方で生み出されてきたが、もし生み出されあり得べき前衛党が、正当性を持つとしたら、それはいかなる地点において「体制内反体制」のワクをのり越えているかという所に求められなければならない。そしてそこに我々がとり入れたものが不断の自己変革、不断の自己否定なのである。正に斗争の中で生み出されなければならないものは、具体的斗争目標の獲得だけではなしに、常にその中での斗争主体の自己否定を媒介とした自己変革なのであった。常に体制内へ、体制内へ、また日常性へ日常性へとくり込まれていく自身を否定することを通してのみ斗争は体制をのり越え得るのであり、そうした主体の変革を通してのみ「勝利」もあり得るのであった。

「支配者」が敵ではない

だが現実の「体制」は物質的基盤があるのであり、その基盤をくずすことは、別に自己変革を媒介とした「闘争」でなくとも可能なのであり、そのことが「体制内反体制」の存在する根拠を与えているのだ。たしかに支配者に対して「反体制」は「体制」のままにおいて打撃を与えることが出来る。国会において議席を一つでも二つでも争うことは、支配者にとって打撃でないなどということが出来るだろうか。大学を民主化し、研究費をたくさんとってきて「反動的」学者でなく「民主的」学者に研究のより多くの自由を与えることが「反動的支配者」にとって、たしかにがまんならない事態にちがいない。だがわれわれの当面の敵にそうした支配者、政府自民党をその政治的代表者とするブルジョアジーであるとは[illegible]の敵は支配者ではなく支配体制であり、体制一般なのである。なぜなら「支配者」とは、体制を支配するのではなく体制によって支配者たらしめられたのであり、「体制」によってのみ支配するのだからである。したがって、「体制内反体制」は支配者を打倒することは出来ても支配そのもの体制そのものは打ち倒すことは出来ない。そして正に我に困難をもたらすものは現在の体制が絶対主義体制でもなく封建的体制でもなく、正に資本主義体制、むしろ自由主義体制といいかえた方がいいかもしれない「近代的」「合理的」流線型の体制なのだからである。

「反体制」とは挑発と裏切なのだ

そこでは我々は全く「自由」である。「自由」であることの基盤、秩序を保つかぎりにおいて。そこで我々は「自主性」を尊重される。正に自主的にこそこの体制は維持され得るのだから。

東大全闘が自らを「狂人たち」として表現した時、この合理性がくっきりと浮き彫りにされ、

（二めんにつづく）

横浜駅前デモ

横国大斗争

学生部廃止の思想を抉る

‖全学バリケード封鎖‖全学バリケード封鎖‖

一月三十一日、五項目要求を掲げ、チェックポイント付きの全学無期限バリケードストライキに横国大闘争は、突入した。この状態を見る限りでは、本学の闘争と非常によく似ている。横浜国立大学における闘争は、保土ケ谷統合移転に端を発し、一月十七日本部封鎖決行により学生部廃止をも含めて闘かわれている点で、東工大闘争と異っている。（編集部）

学生管理機構の実体を暴露

闘争が、大学の学生管理機構としての側面をあばき出すにつれ、学生部の廃止へと突き進まねばならなくなる事は必然である。あくまでも大学機構は、「学問」「研究」「教育」という基盤に大学の存立を置きつつも、イデオロギー攻勢の末端機構としての役割を学生部を通じて果しているのである。この事は本学に於て、羽田闘争に積極的に参加した学友に対して為された奨学金停止措置、あるいは、公安よりの「照会」等の治安当局の一端を果していた事実によっても明らかなとおりである。

私達が、横国大闘争から得た学生部とは何であるか。教授会が、「自治」「学問の自由」等のベールによって自らの存立基盤に対しての立場を鮮明にし得ないでいる「大学の自治」の幻想をまったく排除したものとして、学生部があった、ということであろう。直接的に学生に対する、イデオロギー攻勢の尖兵としての一機構を果しているのが学生部であった。

横国大闘争に於ての本部封鎖によって、秘密文書が暴露され、その結果は、逮捕者の住所氏名のチェックにはじまり、11・12羽田闘争前の学内状況=自治会行動方針組織の人数などのリスト。昨年10月21日国際反戦デーに関しては、ストライキを追及した自治会及び組織、更にその採決結果、「不法行為」に対する処置を考えておく事等が明らかにされたのである。

更に、寮、学生会館、サークル部室、生協の管理運営権の把握。

これ等学生に対する思想調査機関としてあるいは、直接的な学生施設の管理運営から学生自治活動に対する弾圧機関としての二つの役割が露呈されたのである。

イデオロギー攻撃を荷う学生部

学生部廃止闘争によって横国大が突き当ったものこそ、文部官僚によって実体的に担われつつも、"党派"比率・指導者の氏名、各警察権力との密着という事実によって、より鮮明に支配権力とのイデオロギー的対立点が明らかとされた事である。

まさにイデオロギー攻撃の実体機構である学生部が、では、何故にその機能を果し得てきたのか。その間に対する明確な分析は為し得てはいないが、少くとも、はっきりしていることは、学生管理機構としての役割の実体的な表現としての学生部に対して、「学問、研究の自由」の名の下に、「大学の自治」を守るという自らの合理化によって学生部の実体を把握することを避けてきた大学当局の自主規制に対する闘いの中からのみ鮮明にされてくるものであろう。

学生の思想調査および物件の管理を通してはかる人的管理こそが、学生部の根幹を成している。

この事実に対して、大学当局は「国立大学における学生部は、国立学校設置法施行規則第二十八条を根拠法規としているものであり本学の決定だけでこれを廃止するわけにはいかない性質のものであって、この終局的な廃止のためには、さまざまな努力のつみ重ねが必要である」と問題点であるその廃止に対しての確答を回避したのである。文部官僚による管理思想の実体化は、教授会の存亡をかけて対決しなければならない一機構となっている。

文部省通達を廃止し得ぬ大学

確かに、資本制社会の中にあって、「学問とは何か」「大学とは何か」を問う時、その問が現行大学制度の矛盾点に突き当るのは当然の帰路となっている。それは、文部省通達の一つさえも廃止し得ぬまま、文部省の権力を自主的に受け入れる東工大の現状を取っても明らかなとおりである。

文部省に対して相対的には、独自性を主張しつつも、その機構内にもつ、大学管理機構の廃止すら出来ぬ所に横国大学当局のみならず大学機構が位置しているのである。それこそが、東大闘争の中から明らかにされてきた自主規制路線に外ならず、大学法を政治技術的には廃案にし得ても、実質的に担ってきた姿に外ならないのである。

学生部廃止を大学当局に問う事は、とりもなおさず、「学問・研究の場」が、社会的に独立した存在としてあるのではなく、思想弾圧の場として機能している事を鮮やかにさせてくれるものである。

サンドイッチ規制に合う

それは、知的優位性に対するいっさいのベールをはぎとり、逆にイデオロギー再生産の場としての実体を明確にするものである。ここに於ける、知的優位性と、イデオロギー再生産の場としての大学機構が、その現実の姿を明示する時闘争圧殺、団交回避の形をとって現象してくる事は、言うまでもない。「学問、研究、教育」の場としての大学の中に貫布されるこの実体化こそ、学生部、及び教授会と形ち作られた管理運営機構（官僚機構）として現実化しているものである。

横国大闘争の提出した学生部廃止闘争は、この学生部の存在を通じてより明らかにされた大学機構のイデオロギー的存在の現実である。（O）

▶不当＝拘留理由開示裁判◀

論理によって力関係を追究

東大安田砦以後五百名以上が、未だ拘置されており、これまでにない大規模な弾圧がかけられてきている。そしてこの拘留が不当であることを明らかにさせるため、東大斗争統一弁護団は、拘留理由開示裁判を要求した。十三日に裁判要求を出し、五日以内に開かねばならない規定を、勝手にねじ曲げて遅らせた裁判所は、当然予想される事体に対処できぬまま拘留を一方的に押しつけてきた。今法廷の物質的条件云々は問題ではなく、法律を拡大解釈して論理的矛盾を力で押えつけようとする裁判機構の本質が問題である。この裁判によって補釈が早くなることはないが、にもかかわらず裁判機能をマヒさせる斗いの意義は重要なのである。（編集部）

この裁判こそ、裁判の決定版というべき不当裁判である。

拘留理由開示裁判。私は3月24日、東京地裁第二〇一号法廷で行なわれた裁判を傍聴した。実は東工大の被逮捕者に面会するのが目的なのだが。

これは、東大・神田闘争における被逮捕者に対する不当拘留の理由を裁判所に対し、統一弁護団が求めた裁判である。

まず、法廷内で気づいたことは、被告の両側に二人の付添人がいて裁判開始まで拘束しているということだ。私が前に早稲田闘争の裁判を傍聴したがその様なことはなかったのだが。

裁判が始まると、被告はまず六法全書と、筆記用具を要求した。法の「権威」の名のもとにいかなるテマが言われるかもしれぬからである。

そして、判事が拘留理由を読み上げた。まず起訴理由を一般的に述べ、次に拘留理由として①住所不定②証拠隠滅③逃亡の恐れ、の三つのうち、②の証拠隠滅の恐れがある、というのに該当するというのをあげた。

これに対して、まず被告側は開示裁判が遅れた理由を問いただした。そして、次に拘留の理由があまりに主観性に走り、具体性に欠くことを追求した。また、それは自らの無能性を被告に転化していることに他ならず全く認めることができない旨を宣言した。

二人目の被告（依然黙否を続けている）は、更に住所不定、証拠隠滅という理由は黙否の自由に対する侵害であり、捜査に対する協力の強制であることを明らかにし、その不当性を述べた。

三人目の今井被告は、徹底的に闘う裁判延期の理由をまず追求することによって、最大限の「誠意」のギマン性を明らかにした。

次に、判事の、前の二人の場合と全く同様の拘留理由の読み上げに対して今さら、証拠隠滅などあり得ぬ、全く、論理性に欠除した理由であることを追求した。判事は、全く答えられずに、同じことを繰り返すのみであったので被告は、徹底的に「理由を明らかにせよ」と名指しで迫った。それに対し、判事は逆上して、傍聴人の全員退廷を命じ、直ちに閉廷を宣言するという暴挙に出た。被告は、抵抗したが、強制的に法廷外へつれさられた。

最後の裁判は、本学生であった。退廷命令を一切自己批判することなく、入廷させるという全く非論理的対応に、傍聴席はあきれるばかり。

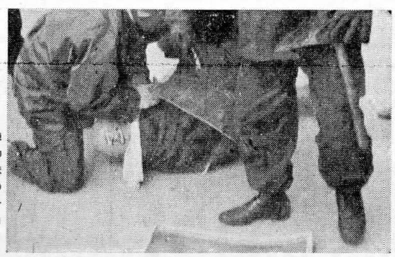
応答の内容はほとんど同じだが、傍聴席で支援のヤジを飛ばした二人が、不当にも裁判所外に退廷させられた。

ここで一応裁判は終った。

恐らく、裁判が重要な意味をもつのは、論理を逆手にとるということだろう。力関係は決定的に圧倒的なわけで、共通性をもちうる部分=論理において、それを逆手にとることによってその力関係の意味を徹底的に追求していくことであるだろう。

その意味で、論理的な追求にして、ヒステリーでもって答えたのは、逆に、彼ら支配者の意思は、論理ではなく、病理であり、その論理は、決定的な大手術によってしか取り除かれぬことを示している。

現体制における裁判、それは、力関係を本質構造とした、病理による論理の裁だんであり、その意味で、全く不当裁判なのだ。（B）

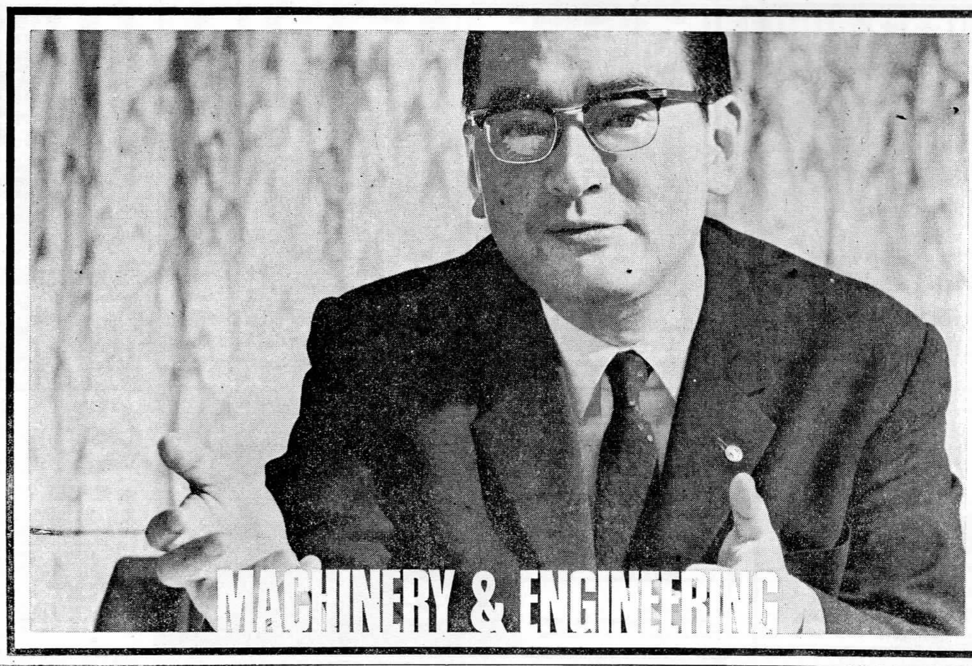


機動隊のテロ

独自技術でアクリル酸エステルの工業化に成功！

東亜合成化学

●資本金48億円 ●従業員 3,500名 ●設立昭和17年3月



ツバコーは貴君の参加をまっています

●明日の日本経済を支えるもの、それは省力産業です。
当社はこの分野において豊富な経験と技術をもって日本経済の発展に寄与してまいりました。当社の取り扱いによる省力機械や装置はあらゆる産業における工場や倉庫に、新聞社に、あるいは運輸機関にと活躍を続けています。
●くわしくは「企業への招待」'70年版1025ページをごらんください。
●いつでもご来社ください。総務部長や先輩が詳しくご説明いたします。

TSUBACO

●主要取扱商品 チェーン・変減速機・油圧機器・コンベア・化学機械・工作機械・建設機械・建築工事・冷暖房
●資本金 6億6000万円
●売上高 年間160億円

椿本興業株式會社

東京支店 東京都中央区築地1丁目13番13号 電話543−3251
取締役東京支店長 池田元紀（東京工大 機械工学科S17年卒）

私達の斗いは、私達にとって何か

東大斗争を、東工大に還元出来ないにも関わらず、私達は一体どうして、東大斗争を口にするのか……

全斗委内の戦術問題

高度な価値基準による保証

二・二〇学生大会、二・二四革推会団交を全闘委としてどう闘うのか、という点を巡って議論が嵩出した。二・二〇学生大会を把えて全闘委内部から出て来た「全闘委の弱さを戦術エスカレートによって乗切って来たことを」問題にすると称した人達を前に私が感じた当惑は次のような点であった。「高度な戦術は高度な価値基準のみがそれを保証し得る筈だ。もし全闘委に弱さがあるとすれば、戦術ダウンこそが問われる所からしか出ない筈である」。戦術エスカレートを問題にすることと、闘争の現象的強化をと叫ぶことの違いは、闘争主体の最もラディカルな問題点であろうと考えられる。前者が自己を資格ある闘争主体として考え、闘争を問題にしながら闘争を問題にする自己を見通さないという点において存在し、後者が自己の内なる問題意識を闘争として対象化し、闘争の中でそれを確認して行こうとする視点を持たざるを得ないという点において存在するのだという、闘争主体の決定的な違いにおいて。

自己・大学の客観的把握

斗争内への自己の位置づけ

革推会のシュプレヒコールに次のような事がいわれている。「機動隊導入反対」「闘争圧殺を許さないぞ」。彼等は「機導隊導入」に反対しているのだという事を私達はしっかりと置さえておかねばならない。それも、全闘委は「放置し抜いて自滅させるか」という永井陽之助を前にしての事であるということを押えて。

一般的にいって、例えば「大学側の我々への対応はナンセンスだ」という限りにおいて、私達は「大学機構を一要素として有機的に構成している授業」をボイコットしなければならない。私達が問題にするのは何であるかという事を、大学側の自己矛盾を通しての矛盾と抵触した私は一体何であるのかという風に見通して行く中からのみ、個としての自己、大衆としての自己を客観的に把握することが出来るのだ。「大学側の対応をナンセンスだと思いながら、大学の実体的構成要素の一つである授業を受けることが出来るのか否か」という二者択一的なつきつめのみが、大学を批判し革推会を批判する自己の立場を見通して行くのだ。回「大学の存在は一体何であるのか大学とは何か、自分が学生であることの意味を問題にしろ」といってみても、「かかるナンセンスな大学で学生である自分を問題にしろ」といってみても、自己を対象化しない所でストレートに出されるこうした問題設定は「自己絶対化、価値観の自己表現なき物神化」でしかない。大学の存在そのものへの問いつめ、大学が果している役割をどのように把えるのかということは「大学側はナンセンス」であるとして表現される私達の中で「大学」に掬いとられることなく存在している価値と、社会的存在である大学が創り出す「人間＝価値」との対立という形において対象化されて始めて自己の対象化を画ることが出来るのではないか。私達の闘争は、自己の内に闘争を位置づけるものとしてではなく、闘争の内に自己を位置づける闘いとしてあり、それ故に自己否定（自己の内なる日常性を破壊して行く）が為されるのだ。

自己の価値基準

斗争主体としての確立

資本制社会の理念的成立与件としてあった「個の確立、学問の独立」は、資本制の最高発展段階としての帝国主義段階では、資本と自からの要請としてかかる理念をも充来の在り方から否定せざるを得なくなる。資本への政治的配慮が大学に向けてもなされてくる。かかる状況の中から端緒的には「理念の回復」的意識から大学闘争が為されるにしても、既に資本制自からによって破産宣告されたものに私達はしがみつくことは出来ない。私達の立場を大衆的＝根底的に自らが確認する過程、獲得して行く過程として闘争はあるのであり、既に日常化してしまった「左翼性」から闘争は出て来るのではないのだ。バリケードは日常化が破産宣告したものにかわるものとして築かれたのである。

学生大会、革推会団交を巡る議論は、闘争主体の価値基準を軸として確立出来るか否か、という時点において自己完結的に軸を（その内容を明らかにせず）固定化しようとすることと、軸のあり方を闘争の中に位置づけしようとすることとの対立であったと言える。東大において全学的に「七項目貫徹」派と、「七項目獲得」派に分裂して行ったのは、日常性の生み出す価値基準が逆に日常性を問いつめた時に起きた価値観の分裂としてあったのである。それをある人々は「絶えず革命の側に自己を置くことの出来る者と、混乱を苦痛に思う者との対立」として極限化させた。

「大学が労働力商品の（再）生産過程なのではなくて、帝国主義的支配秩序そのものの再生産の一環としてあるということは、そこにおいて直接具体的に諸科学、諸技術イデオロギー、及びその実体的荷い手が生みだされるということのみをさすのではなく（勿論このことに基底的根拠を置くのだが）大学が何の異状もなく存在しているということそれ自体が、いいかえれば大学が権威と秩序を保っているということ自体が、更にいいかえるならば帝国主義の大学支配が貫徹されているということ自体が、帝国主義の人民支配の一つのテコになっている」ということの分析の中には、自己の立っている所を、「一体何故に自分が大学側をナンセンスであるというのか」、「何故に自分が大学を問いつめる等と口に出来るのか、何故に闘争をするのか」として対象化し得る者のみが現実に対する真の客観性を獲得して行けるということがはっきり示されている。自己の価値基準を絶えず見通して生きざるを得ない革命家としてのマルクスのみが「資本論」を生み出し得たというのはこの点に根拠を置くのではないのか。

日常性からの価値基準

革推会「機動隊導入」反対の本質

革推会は「機動隊導入」に反対しないのではないし、私達全闘委とは違うけれども「反対」闘争をするだろう。私達はこうしたことを確認した上で、客観的に私達と対立関係にある革推会の存在基盤日常性に依拠した価値基準をもった者としての現実過程の人格化と私達がどれ程鋭くラディカル＝根底的に対決できるかを追求しなければならない。資本制の理念を大学において回復しようとするファシスト革推会の中にある資本制そのものの自己矛盾、人間蔑視を自己からの放逐として徹底的に粉砕していかねばならない。それのみが闘争主体としての私達が、大学側を批判する資格を築く持てるのだということを意味する。

大学という特権的な場を守ろうとする人間その人間が「戦争反対」を口にしながら犠牲になった人々を美化するイデラシデを自己の中から盗発すること、かかる権力の人格化を粉砕して行くことはすぐれて私達を問題にするのだ。

価値観対立の斗争

ブルジョア思想との斗い

型としてであり、もう一つには東大闘争が投げかけた問題を自己のものにする為の私達の立場の問いつめを、価値状況の批判的克服を通してやって行くことであり、最後に私達を徹底的に闘争の中に位置づけ対象化することである。日共＝民青の「プロレタリアの為の学問論」「プロレタリアに役立つ学問論」の不毛は、プロレタリアの現在的姿を克服しなければならぬ私達を、私達の主体的反省なしに位置づけることにある。日共＝民青とは実体的に異なっていても資本制自からが破産宣告した「個の確立、学問の自立」へ進む価値状況を粉砕して行かねばならない。闘争の意識内容は問題にはならないけれども、闘争の意味を自己の中に把え返して行かねばならない。自己の中にある資本制の腐朽化によっては包摂されぬものを対象化した者にとっては「ブルジョア科学」の批判は、ブルジョア社会にとって替わる社会の建設の一切でしかないのだ。

再び繰返すならば、生活基盤切体制に組み込まれたものであることは明らかである。この生活基盤が問題になるのはわれわれにとってだけなのであって、こうした私達の中に包摂されずにある価値観を同様にしつつ共産主義の側に獲得されて行くことのみが自己完結を回避する方向なのではなかろうか。「大学人、知識人の存在基盤そのものへの問いつめ」が問題にされる時、問題にしている自己は一体何であり、何故に問題にするのかを対象化しなければならない。その時にのみ真のマルクス主義的科学が生まれるだろう。

り、かかる価値観の基盤を粉砕し私達のそれを全面開化して行く中から「人間が人間でなくなる」、「非日常の日常化を更に極限する」ことを、追求して行くことである。

バリケードを守れるのは、深化されたプロレタリア的価値基準のみであること、この立場まで私達は突き進まざるを得ないであろうだから私達は腐朽化した帝国主義の諸矛盾と闘うのだ。

価値状況の批判的克服

＝国家＝大学の創出する価値破壊

京大入試粉砕闘争は、十・二一新宿闘争と同様にラディカルな問題を提出したが故に反動も大きいすぐれて大衆的な闘争であった。十・二一新宿闘争が「中枢権力」闘争ではなく、騒乱罪との闘争として現象したということ、すなわち私達の内なる「国家」との闘いにならざるを得なかったのと同様に、今や全国大学闘争はそこに到達する意味内容を否応なしに持ってしまったのだ。

[illegible]出す一切の価値の破壊は、私達がそれを拒否することなくしてはまず存在し得ず、私達の闘う意味はそこにしかない。この一点を見通して行くことによって、客観的状況に私達を上向させて行き、徹底的な自己否定をつきつけられて行くことを保証する。かかる立場のみが現実過程への徹底的な関わりを、そして真の科学の形成を可能にするのではないのか。

したがって私達の東大闘争は一[illegible]

闘争を生きること、このすぐれて分析的で科学することを要求すること。「学問研究の自由」とはブルジョア社会秩序を学問的、イデオロギー的、そして実体的に構成要員として築きあげることを強制する「自由」であり、ブルジョア学問を研究する自由でしかない。大学入学の賃労働者にならないで、大学に陳列されている「学問」を「勉強する」と称していながら「選択」せざるを得ない自己を対象化しないでかかる「学問をする自由」を語る時、およそ語るに落ちるとはこの事をいうのだ。

文化運動・サークル活動とは

文化部会リーダース・キャンプ総括

文化部会が利益集団の連絡組織から脱皮し運動体として形成されてゆく過程として、文化部会リーダースキャンプ（リーキャン）はもたれた。

サークルの現状

文化部会に所属するサークルの現状を視ると現象的には二つの形がある。一つはその個別対象領域の技術的習得に懸命で、それに多大の時間をさき、その結果サークル自間の討論の不足をなげいているものであり、他の一つは討論は行なわれているが、ぬるま湯的な親睦の場・社交の場となる結果、その個別対象領域に対するつきつめを見失なってゆくものである。

この二つの形は表面的には全く逆の様に見えるが、本質的な差はないのだ。なぜなら、その個別対象領域とのぎりぎりの緊張関係の中から、運動体としてのエネルギーを生み出す方向性を提出し得ないからである。

ではなぜ、サークルが、「親睦の場」「社交の場」となり、またそれを希求せざるを得ないのか。ここでサークルの発生過程を考えねばならない。

サークルの発生

サークルは自然的に発生するものでもなければ、外的状況と無関係に生れるものでもない。では、どのような状況下でいかなる関係をもって発生するのか。

われわれ学生は、現在的には総体としてプロレタリアートでもなければブルジョアジーでもない。一般的にいわれるように「労働力商品の再生産過程」にある存在である。そして産業界の要請する高度の技術的技能を習得することを、自らの指向する身分（階級、階層）への上昇過程として必然づけられている。ここにおいて学生の受ける苦痛の第一は、教育の帝国主義的再編と呼ばれる専門化、部分化から生ずる。専門化、部分化は学生を労働力商品として、より良質化するために考え出されたものであり、これによって人間の感性的諸能力が一面的にきりつめられてくるのを感じざるを得ない。苦痛の第二は、自らを産業界の要請に答えて、より高く売り込むためには学生内の競争を余儀なくさせられる。そして自らを高く売るために日夜、分断化され数量化された個として高度の技術的習得にはげまなければならない孤独感である。

以上のような疎外状況に対する補償行為としてサークルは発生する。つまりマス・プロ教育によって完全に数量化された学生はその失なわれた共同性・連帯感を求めてサークルを結成する。必然的に親睦の場とならざるを得ないのはこのためである。これによって獲得されるのは個人的結合だけであってサークル総体としての共同性ではない。しかもいかに内的に自由であるかのような幻想を抱けたとして、前に述べたような外的状況に対する直対応である限り、内部指向的閉鎖性は貫徹し、運動体とはなり得ないのである。では、いかにしたら文化運動たり得るのか。

文化運動とは……

これまでサークルの現状及びなぜそうなったかは語って来たがその状況をいかに突破するかを語らない限り不毛である。

文化運動が「文化」と「運動」に切断され、運動がない状況は、「文化」における創造意識と「運動」における批判意識が相互補完を欠落させているからである。なぜなら「文化」が個別対象領域の部分的単純再生産に終り全体的把握を不可能にしているからである。我々が「文化運動」を「政治運動」に転落させようとするものでもなければ、半文化人、半運動家を創造しようとするものでも全くない。半文化人、半活動家がいかに犯罪的であるかは、戦前の自称左翼が戦中ファシストのイデオローグとして活躍したことを述べるまでもなく、現代においても芸術を教条主義に転落させている。

真の文化運動はその個別対象領域を極限的につきつめる中から社会総体を把握してゆかなければならない。それは単に文化運動の論理と政治運動の論理を平均させることではなく、個別対象領域のもつ普遍性を獲得することである。間違えないでほしい、我々の呼ぶ普遍性とは「芸術一般はいいものだ」と言う形の超歴史的、超階級的なものではない。個別対象領域を追求し獲得された社会総体に対象領域の活動を再び具体化することである。

それは過去の価値基準を不断に破壊し、階級的矛盾を止揚し人間の全面的解放を獲得する論理を構築することに他ならない。

文化部会
役員会

正義は平和を生じ　正義の結ぶ実はとこしえの平安と信頼である

□真の大学建設を□

建築学科助手会から

スチューデント・パワーの意味……□

今や世界にわき起ったスチューデントパワーに対し、そして我が学園闘争に対して、その本質が何であるかを理解しようともせず、これを表面に把えて批判し、対策的、弾圧的に対処するという大きな誤りが行なわれている。何故若者の力が結集され、その主張が何であり、いかに現状の革命的変革を進めようとしているかを理解することは現在の体制を保持し、そこに安住して自らの利益を貪る者にとっては耐えられないことであり許せないことであろう。

国連の調査報告書が、この若い力の重要さを説き、現代社会の矛盾に真向から対決している姿勢を認め、文明を進歩させるエネルギーであるとして、これを単に対策的に処理するのではなく、その可能性に信頼し、いかにしてより強靭な力として引き出していくかが課題であるとしていることは優れた認識である。この様な認識は、自己を批判し、歴史の現実の前に謙遜に立ち、正義を求める者にのみ可能なことである。

我国の現状はこの様な認識とは相反し、保守反動政権の下に時代に逆行する帝国主義的方向へ着々と押し進められている。即ち、東洋一を誇る軍事力の育成、日米安保条約による軍国主義化とその重点基地としての沖縄に対する犯罪的な処置、ベトナム侵略戦争への加担、大資本優先の政策と政治の腐敗、東南アジアへの経済的侵略、建国記念日制定や靖国神社国家護持による精神的圧迫、義務教育における神話復活や国防教育の実施等々である。そしてこの触手は自治の府大学をも完全に冐するに到っている。大学はこの現実に対し、常に学問的立場に立って体制を批判するというその本来の機能を果し得ないばかりでなく、自ら崩壊の危機に瀕しているのである。

大学の現状……□

学歴偏重の社会に対して企業の望むタイプの労働力を養成することのみを目的とする大学、官僚や幹部候補生を無責任に送り出す大学、企業及び国家権力に迎合した一面的な知識の切り売りをする大学、学生を財源とみてあくどく稼ぐ大学、学生の自治、自由を奪い人格を無視したマスプロ大学、教授会自治を旗印に封建的制度を守り、若手研究者、事務職員、学生を疎外する大学、機動隊に守られ、自治と良識の府としてこの立場を放棄した大学、これらが今我々の前にある大学の現実の姿である。

本来大学には知識人の集まりとして、自由と平等の環境にあって、学問研究と教育研究と教育の拡充、深化に努めると共に社会の動き、歴史の流れに対して指導的発言と行動をとる責任があり、体制の誤りを批判していく責任がある。この故にこそ国家権力をも排除する強い自治が重要なこととして主張されてきたのであり、この意味においてこそ構成メンバーとしての学生の存在も意義づけられると考えられるのである。

しかるに現実には教授会自治のみを大学の自治とし、人事権及び学位審査権をもった教授会は、終身雇用制の故に安閑として若手研究者、学生の上にあぐらをかき、先人の築いた大学の権威の遺産を喰いつぶしつつ、講座制の封建的運営を砦としてその社会的責任の遂行を怠って来た。そして若手研究者、大学院生等の研究の自由を奪い、基本的人権を侵害する暴挙が日常的なこととされて来た。自らは研究をせず、若手研究者や大学院生に対し、学位や人事のにんじんをぶらさげて馬車馬の如く走らせて委託研究をこなし、その成果を自分のものとして発表したり、自らの責任で行なうべき教育活動を助手に押しつけるといったことが平然と行なわれて来ている。この様な現実を批判する者を排除し、おとなしく追従する者のみを残してその封建的体質を保持せんとし、この故に内部的にも腐敗堕落を生じ弱体化し、歴史の新らたな方向に全く対処出来ないような形骸化が進んで来たのである。この様な状況の故に、学生の心を知ろうともせず、この現実に対する抗議として起された行動を単に表面的な暴力として把え、尚悪いことには自らの権力の保持にのみ心を奪われて率直な態度をとりえないという事態を生じ、容易に大学を国家権力に明け渡すことになったのである。

機動隊導入は一時的な学園の秩序回復の手段であるという欺瞞的な説明もあるが、真の学園の秩序は、大学がその構成員全ての平等の働きにより民主的に運営され、社会における正しい機能を発揮しうるところに存在するのであり、現に機動隊導入により大学の自治は奪われ、研究教育の自由も大巾に侵害されているのである。そしてジャーナリズムはこの内部の実状を正確に把えることなく、安田講堂落城その他一連の報道にみられる如く表面的に扱い、しばしば一般市民の正当な判断を疎外している。

斗争の意味と今後の方向性……□

われわれ建築学科助手会は、この様な現実をふまえつつ、自らの置かれた立場を顧みて改革すべき多くの不合理に気づき立ち上がった。これまで余りにも非人間的に奴隷の如く扱われて来たために、当初意見を述べることすら躊躇した助手の現実は改革に着手する可能性をも疑わせる程であった。しかしわれわれの発言が工学部助手会結成の方向にも取り入れられ、建築学科内でもわずかながら影響を生じてくるに及んで、学生の提起した問題とも相関連して除々にではあるが改革の手がかりをつかんで来ているように思われる。具体的には大学の民主化、管理運営への参加、講座制の廃止、研究の自由の獲得、教育における権限の明確化、学位、人事、大学院制度の問題その他を挙げて積極的に問題にとりくもうとしている。

学園の解体を叫ぶ声も聞かれるが、やはり助手という立場でわれわれの考える方向は、解体ではなく改革である。しかしこの改革は、現在の教授会の手で上から行なわれるものでは無意味であり、現在の打破をこえて全大学人の手で行なわれる改革こそ真の大学建設である。

今こそ大学人の全てが平等に主体的に大学の存在について考え、その責任を自覚した上で協力し、真の大学の自治をかちとり、その機能を最大限に発揮するために出発する時であろう。

東工大闘争勝利、四・二八沖縄奪還闘争勝利安保粉砕日帝打倒

東工大全学闘争委員会・新入生交歓会スケジュール

日時	4（金）（一日目）	5（土）（二日目）	7（月）（三日目）	8（火）（四日目）	9（水）（五日目）	10（木）（六日目）	11（金）（七日目）	12（土）（八日目）
9じ～12じ			〈サークル紹介〉文化部会	〈サークル紹介〉文化部会 新聞部会	〈サークル紹介〉運動部会	〈サークル紹介〉運動部会	〈サークル紹介〉技術部会 社会部会 専門委員会	クラス会
1じ～4じ		〈全闘委・新入生交歓会〉映画「アルジェの戦い」 講演 羽仁五郎（歴史家） 清水丈夫（安保全学連書記長）	〈農民と連帯する日〉映画「三里塚の夏」 講演 戸村一作（三里塚芝山連合反対同盟委員長） 富岡政男（砂川基地拡張反対同盟副行動隊長）	〈科学技術を考える日〉講演 水戸巌（東大核物理学者） 星野芳郎（技術史家） その他	〈全共闘と連帯する日〉映画「日大闘争の記録」 講演 東大全共闘 日大全共闘 その他	〈闘う者の日〉映画「圧殺の森」 講演 全学連（金山委員長） 反戦青年委員会 反戦高協	〈安保・沖縄を考える日〉映画「'60～'70炎」 講演 古波津英興（沖縄県会） 北小路敏（安保全学連委員長）	〈安保・大学を考える日〉講演 野坂昭如（作家） 本多延嘉（革共同書記長）
4じ	全闘委 前夜集会	クラス編成 クラス会	クラス会	クラス会	クラス会	クラス会	クラス会	クラス会

（14日以降の企画は未定）　新入生を除く学生の通しチケットは三〇〇円です。

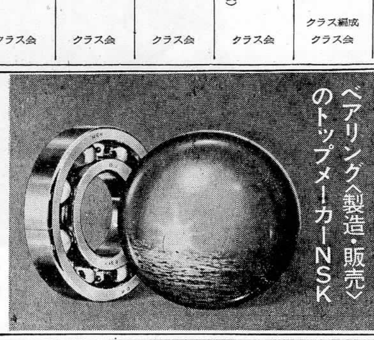
輸送革新

輸送・荷役・包装・保管の物的流通技術各分野における革新とその総合化をいかにすべきか
また国内はもとより国際の舞台で陸・海・空それぞれの特性をいかに総合化すべきか
これが世界に拠点をもち総合輸送に生きる日本通運の課題です

日本通運　総務部人事課
東京都千代田区外神田3丁目12番9号
〒101　電話（03）253－1111（大代）
会社案内を用意いたしておりますのでご一報ください

日本精工が求める人材！
● 創造力と実行力に富む人
● 探究心に富み積極性を有する人
● 誠実で協調性に富む人

採用関係連絡先
日本精工（株）総合管理室（人事・労働）
東京都千代田区丸ノ内2-20（郵船ビル）〒100
TEL（281）3821



ベアリング〈製造・販売〉のトップメーカーNSK

会社概要
●創業　大正5年11月8日
●資本金　46億3300万円
●本社　東京都千代田区丸ノ内2-20（郵船ビル）〒100
●事業所　技術研究所－1、工場－4、支社－10、営業所－11、海外－3
●年間売上高　約400億円
●従業員　約6300名
●主要製品　各種ベアリング、工作機械部品、自動車用ベアリング部品